

	編集/コンビニの会事務局 連絡先/〒452-0822 名古屋市西区中小田井 2-431 TEL/FAX(052)505-6082(コンビニハウス)
	障害をもつ人たちの地域生活を支援する 特定非営利活動法人 コンビニの会 定価/150円 昭和54年8月1日第三種郵便物認可
<hr/> 第117号 <hr/>	



夜市でにぎわう平遙(へいよう)古城内の街路

西安への道

カメラマン 安藤 吉郎

遅い夏休みを取って、中国内陸部の西安へと向かった。いにしへの都・唐の長安と歴史で覚えてから久しい。北京から高速鉄道では、山西省の大原で乗り換えるのと、南よりの洛陽を通過して直通で行ける二つのルートがあった。去年も訪れた娘子関(父の戦地)に立ち寄ってから、大原南方の平遙という街をぶらつくことにした。

中心部に周囲六キロほどの城壁に囲まれた古い街並が平遙古城(世界遺産)だ。明から清の時代(二五九〇年〜一九一一年)に作られた城壁の高さは約十メートル前後。城壁からの眺めは壮大で悠久の時の流れを感じる。古城内は山西商人の拠点として栄え、街路・銀行・商人宿などの伝統建築物は往事の面影を色濃く残しているようだ。泊まった宿は四合院といって東西南北に住居が向きあっている。日本の住宅環境では見かけない空間だ。その後、平遙をあとに西安へと向かった。

(次頁へ)

車窓からは中原(ちゅうげん)と呼ばれる黄河中流域の平原と田園風景が過ぎて去ってゆく。西安では兵馬俑見学を楽しみにしていた。駅前から頻繁にバスが出ていて、一時間余り乗って秦始皇帝陵博物院に到着。その敷地内に巨大な屋根に覆われた兵馬俑の遺跡があった。中に入ると自然と気持ちが高ぶってくる。大部分はバラバラの状態で発掘され、修復されているようだ。一体、一体顔付きが違うのも感心する。因みに十月下旬から東京上野の国立博物館で「始皇帝と大兵馬俑」展が開催されている。

旅では人との交流が第一だ。今回印象に残ったのは、男女中学生グループとある記念館での出会いだった。その日は、抗日戦争勝利七十周年の休日。みんな明るくて誠実に話をしてくれた。私の今までの体験では突然、中国の若い人に話しかけても、きちんと応対してくれる場合がほとんどだ。いきなり現れた初老の日本人は、彼らの目にどう焼き付いたのだろうか。



(上) 西安の兵馬俑

(下) 仲良しの中学生グループ

雑記 ごまめの歯ぎしり

オーストラリアの友

先日オーストラリアに住んでいる友達が、3人の子どもを連れて1ヶ月ほど日本に帰ってきていた。友達とは中学の同級生で、結婚前には一緒に住んでいた仲である。お互い子供の年齢も近く、2〜3年に1度帰ってきた時にはできるだけ一緒に過ごしている。

うちの子供は英語を勉強していて、友達の子供は日本語を勉強しているが、最初のうちはそれぞれ自分の母国語中心にしかしゃべらず、なかなかうまくコミュニケーションを取れなかった。でもしばらく経つとお互いに一生懸命相手の言葉を使って話していた。子供が小さい頃は言語が何かはあまり問題ではなく、「子ども語」という感じでコミュニケーションをとっていた感じだが、中学生になるとさすがにそんなわけにはいかないので、勉強していることを実際に生かす絶好の機会となっていたかと思う。

友達の子供が通っているオーストラリアの学校では、日本でいう中学生までになんと7か国語を習うという。小さな頃からいろんな言語に触れて、中学生になった時、自分の勉強したい言語を選択し、さらに勉強していくとのことだ。英語を教育するのにあれこれしている日本との違いにとでもびつくりした。また、友達の夫は現在学生で収入がないが、国からの補助が20万近く支給されるため、友達がパートで働くだけでも生活していけるという。

テレビやネットで様々な情報が簡単に得られる今日でも、やっぱり実際に体験・経験してみないとわからないことは多いのだと思う。毎回友達が帰ってくる度に、私も子供達もお互いの学校や生活を知り合うとても貴重な経験をさせてもらっている。

(会報委員 鈴木 奏子)

秋祭りの朗読会を終えて

通所部 生活支援員

有満 義昭

◆「自分たちが感じていることを文章にして、色んな人に伝えたい！」

地域で活動していらつしやる朗読ボランティアさんの美しい声に乗せて、障害のある人達の「自立への願い」や何気ない日常の微笑ましいエピソードが読み上げられていくと、秋祭りの会場に共感の輪が広がって行きました。

会報ウィルタイムズを出すきっかけとなったのは、仲間達が（通所施設では通所者を仲間と読んでいます）書き上げた文章を「とても素敵ー！」と言ってくださる方たちがいたからです。もつと沢山の人に伝えていきたい・・・という仲間の願いが会報ウィルタイムズ発行の原動力になっていました。が、残念ながら披露出来る場所がなく、何か良い

方法はないだろうかと考えていた頃に地域で活動している朗読ボランティアさんが居られることを知って、会報ウィルタイムズの朗読会が始まったというわけです。

発表の場を与えられたことは嬉しいことですが、自分の気持ちを文章にするこの難しさにも向き合ねばなりません。執筆する作業は、会話することとは違う難しさがあり、朗読会を主催しているパソングループの4人は考えては打ち、打っては消して、また打ち直すと言語具合にかなり難儀をしていると言っているのが本当のところ。今回はその奮闘ぶりを紹介したくて、会報の紙面を頂戴しました。

◆「執筆の難つや」

執筆はそれぞれのペースで進めていきます。ある程度書いていただいているから、どういった話へ最終的に持っていきたいのか、この作文を通して伝えたいことは何なのかなど、話し合いを積み重ねていきながら進めて



いきます。編集をする前の文章でよくあることは、言いたいことは何となく伝わってくるけど、文章の前半と後半とで辻褃が合わなくなっていて伝えたいことが分からなくなっていたり、同じ言い回しや似たようなエピソードが何度も出てくるわりに、書き手が伝えたい気持ちや情景が浮かばなかったりすることが多いのです。きつと、その時に感じていたことを伝えたいと思つて一生懸命書いてはいるけど、伝える語句が乏しかったり、書いている内に本当に言いたいことが何なのか迷つてしまい、結果的にぼやけた文章になってしまうのだと思います。

その方の障害によっては、頭だけ、左手だけが動くといったように、体の一部分だけを思いパソコンを操作する訳ですから一つの文字を打つのも健康な人のように簡単では無いのです。「あかさたな」と50音順に出してくる文字入力装置を使い「わ」「た」「し」「は」「ら」と一文字につき一回ずつボタンを押して執筆していくというやり方をしてるので、頭の中で考えながら打ちこんでいる最中に別の「書きたいこと」が出てきて、

文の流れをつい忘れてしまふ、そんなことがよくあるそうです。

読者の方に伝わり易くする為に、下書きが終わった作文は、利用者と職員とで一緒に考えて「編集」をする時間がパソコングループには必ずあります。書きたい内容を再確認したり、情景の書き方をもう一度一緒に考えたり、意味が飛び飛びになつている文章を一つ一つ繋げたりと、その編集作業は、書き手によつても違いますが、仲間、職員ともに一番大変な時間だと思います。

◆「伝わる文章とは」

一時期、職員として起承転結型というか、結論にしっかりと道筋をたてて進んでいく文章スタイルを意識して、取り組んでいたことがあります。結論から言わせていただくと、それは私の間違いでしたが、その時のことも少しお話ししたいと思います。

Mさんという利用者さんがいらつしやいます。いつも素敵なお詩を書かれる方です。彼女は最初から文を繋いでいくような執筆はしません。苦手だからです。では、どうやっ

て作品まで仕上げているのかというと、Mさんが心に浮かんだ言葉を「ぼろ」つと口から零す時があります。その瞬間を職員が逃さないようにして拾い集め、集まった言葉の欠片をMさんと相談して繋ぎ合わせて「詩」という形にして完成させています。私が担当させていたく前から、このような方法でMさんは詩を作り続けています。

一方、他の利用者さんは会報のような構成がしつかりとした文章を書き上げます。その為、編集の時間では、読者の方が分かりやすいように時系列順に文を並べ替えてもらったり、結論は最後の方で述べてもらったりと、構成を意識した編集のやり方をしてきました。

ここで一つ、私を悩ませていることがあります。それは皆の表情です。Mさんは、すごく楽しそうに執筆をし、他の利用者さんは難しそうなお顔をしておりました。この差は何だろうかと考えていました。文体が違うからなのか。みんなと相談をしながら編集作業をしているのに、なぜか、編集を繰り返すうちに書き手の「持ち味」も損なわれ

ていくような気もしていました。例えるならば編集をする前の文章は、意味がわからない箇所が多いので、まるで絵画の上に水を垂らしてぼやかしたような「絵」。一方、編集が終わった後の文章は、整理され意味は伝わるようになったけど何だか魅力を感じない「絵」になってしまふ……。2つを見比べて気付きました。「そうか。文法的には間違っていないけど、この書き方は利用者さんが苦労して手に入れてきたオリジナルの書き方なんだ」と。

文字を使って自己表現をする、その表現方法は様々です。「川柳」だったり、一人称でも書きやすい「手紙」というスタイルだったり、順序立てて説明が出来るのであればインタビュー形式にして、職員がうまく合の手を入れれば読者に伝わる文章になります。大切なのは、利用者一人ひとりが一番表現しやすい形が、それぞれにあつて、言いたいことや伝えたい思いをしっかりと読者に伝わる「形」にすることであつて、



その形式は問わないということでした。表現方法を一緒に考えていきながら、型にはまらない自由な発想で、利用者さんの「持ち味」をいかに活かして形にしていけるのかは、職員としての働きが大きいと思います。

ある利用者さんはこう言います。「わかる人だけにわかればいい。この手を加えない文章が僕の持ち味だから」と。職員としてはこの意見を尊重したいのです。ですが、文章の意味が前半と後半で違っていたり、変な誤解を招くような表現があったりする場合、やはり編集が必要な旨を利用者さんにお伝えするようにしています。「伝わる文章であることと、持ち味を損なわないこと」この2つのバランスが大事なのだと思います。その為にも、お互いが歩み寄って、一緒に作り上げていく編集の時間がこれからもパソコングループには必要だと感じています。



◆「編集の向かい側」

「読者に伝わるように書く」という重要性

はわかるけど、編集の時間は苦痛だな」パソコングループのみんながそう思っているのかといえ、そうではありません。それは、編集の時間を通して「私が言いたいことは、こういうことだったんだ」と自己寛知したり、この書き方では「伝わらない？」と疑問に思ってくれたり、文筆業の難しさの向こうにある「書く楽しさ」に気づく時があるのを知っているからです。私自身もそうですが、何度も書き直している、何が言いたいのかがはつきりしてくるといふか、自分が伝えたかったことの奥深くに、自分も知らなかった、もう一人の自分にせまってしまうような感覚になる時があります。きっと利用者さん、そういう自分掘り下げるといふ経験をしているのではないかと思います。これは何年も執筆活動をしてきたからだと思えます。もし編集作業が苦手だから、嫌いだからという理由だけで、職員がすべての編集を受け持っていたら、こういった経験はしなかったのかもかもしれません。利用者さんも「ああ、もう疲れた」と口では言いながら、しばらくすると「こは、こは」思ってたんだよね……」

ともう一度編集の仕事にしっかりと向き合ってください。

◆「希望をもって活動をしていきたい」

秋祭りが終わった後、みんなから「やっつよかった」という嬉しい言葉をもらいました。今後も朗読会という発表の場を通して、交流を拡げていきたいと考えています。みんなが朗読会をしたいと願う心奥には「人とのつながり」を求めている気持ちがあるのだと思います。みんなは、文章を少しでも書き上げると「見て、見て」と嬉しそうに教えてくれます。まるで「私はこう思っているんだよ」「こんな経験をしたんだよ」と伝えたくて仕方がないといった感じです。職員としては実に嬉しい時間です。

「伝えたい」という思いがある以上、私たちは繋がっていきけるのだと思います。エゼルフ祉会の中だけで完結せず、みんなの笑顔が増えるような支援や活動をしていきたいと思うこの頃です。ぜひ仲間の次なる作品にご期待くださいませ。

原点に戻る

NPO法人コンビニの会 代表理事

宮川 優子

このところ、毎号のように介助介護の担い手不足の問題が深刻になっている状況をお伝えしています。自分たちの努力で解決できることもありますが、社会の急激な変化によって起きているために努力では解決できない課題もあります。たとえば、契約制度が整うにつれて利用者との関係が以前に比べると変わってきました。制度ができる前には介助介護する側とされる側には濃密な信頼関係があったような気がします。それが支え手の「やりがい」につながっていたとしたら、今の制度の中でどうすればそれを見つけれられるのでしょうか。

コンビニハウスが発足した当初、市江由紀

子さんがコーディネーターとして明確な基準を持っていたので、利用者主体のサービスの提供に職員は迷うことなく現場で起きた問題を素早く解決できていたように思います。障害のある人が大切にされる社会はだれにとっても暮らしやすいという確信に裏付けられた強い願いをもう一度確認したいと思いました。大きな努力の末に支え手とともに自立した地域生活を24年間続けてこられた市江さんの経験を聞く機会がありました。去る10月17日にNPO法人愛実の会で職員や家族の前でお話しくださったお話をまとめました。(宮川優子 記)

昨春、体調を崩してから口の周りの筋肉の動きが悪く聞き取りにくく、前向きな考え方もできず迷いながらも今日はお話することにしました。以前なら「市江さんの話を聞いて元気が出ました」と言われたのですが、



サポートセンター舞夢
代表 市江 由紀子さん

今日は居宅介護サービスの削減やヘルパー人材の確保など困っていることが多くなりそうです。
思春期の頃から一人の人として自分らしく生きることや存在価値を模索してきました。筋ジストロフィーで亡くなった方の詩に「たとえ短い命でも生きる意味があるとすればそれは何だろう。動かぬ体で一生過さず生きる価値があるとすればそれは何だろう。」この言葉が強烈に突き刺さりました。

自分の生きる意味を考え続けましたが、簡単に答えが出ないことに気づきました。

24年前は全介助の障害者は親と暮らすか施設入所しか選択肢がありませんでした。私らしく生きる具体的な選択は家を出ること。21歳になる直前に勢いと若さで母との生活からAJU自立の家での自立生活に飛び込みました。当初は障害者介助のための制度がなかったので3か月で30人のボランティアを集めることから始めました。1か月に最大100人ものボランティアに支えてもらった時期もありました。善意と自発性に頼るボランティアにせめて交通費と若干の謝礼を出したいと思い、自分の生活記録をつけて名古屋に提出し、訴え続けました。1年半後に名古屋市の単費事業として一日平均5時間最大7時間の自立支援事業が始まりました。それがようやく2003年に国の制度として障害者支援費制度が始まり、障害者自立支援

法をへて、現在は総合福祉法の下での重度訪問介護を利用しています。

さて、AJUでは「自分にはどんな助けが必要なのかを自覚すること。手伝って欲しいことを伝えること」が、障害者が自立するためには必要だと教わりました。確かに生活の一部に介助を必要とする障害者は、そのスキルを身につけることで自立生活を作っていくのかもしれない。ただ、生活の全てに介助が必要な者には、それだけで、解決できない課題が残るように感じようになりました。ヘルパー側にもスキルアップが必要なのです。私の場合、最長18時間になると、同じ空間にいることを負担に感じる人では、お互いに息苦しくなると思います。誰でもいいから必要なことを手伝ってもらえればいいのではなく、誰に手伝ってもらおうかが、生活の質を左右する大切な要素なのだと思うのです。



常時介助の必要な私しかできないことは、多くの仲間に代わって訴えることだと思いました。AJUから離れてコンビニハウスの活動を始めました。従来の制度には乗りにくい、ニーズの高い使いやすい緊急一時保護の仕組みを作りました。支援費制度が始まりサービス提供時間も増え、社会福祉法人を取得するに至り、安定して活動できることになりました。

ちょうどその頃、別のテーマが気になるようになりました。「障害肯定」ということです。障害者は自分のことを肯定的にとらえられないことが多いのです。「あなたを大事にしない社会はよくない社会だ」と考えるちよつと変わった親に育てられた私は珍しく自分のことを肯定して生きることができました。でも親から社会に迷惑をかける存在として扱われ育てられれば、大人になった時に自分の存在を肯定出来ず、萎縮してしまうの

ではないでしょうか。もつと自分を肯定してほしいと思います。またこのことは健康な大学生とのやりとりでも同じことを経験しました。自己肯定できないのは障害者に限らず今の若者も同じなのだと考えました。

そこで、新たにNPO法人舞夢を立ち上げ、昭和区川名にフリースペース舞夢を作ることにしました。誰が来て、何をしてもいいフリースペース、世代や立場を問わず自由に入と交わる場を作りたいかったのです。最近では多くの人が交わる機会になればと、様々なイベントを企画して、たくさんの方が集って下さるようになりました。人と交わってこそ豊かに成長できるのです。最近では体調が悪く、出かけて新たな出会いのチャンスが減っています。そこで道路側に向けてメッセージボードを出して、思ったことを短い言葉にして伝えるようになりました。写メする人も出てきたり、楽しみに待っている人もあるようで

冊子にまとめて販売しています。

私自身の重度訪問介護の時間数が名古屋から減らされ、量と質の両面から人材確保の課題など苦しいことがたくさんあります。それでもこの暮らしを続けたいと強く思っています。

2011年3月3日のメッセージよい

「あなたに手を貸してくれた人は
みんな嬉しそうな顔してるね」
母が幼い日の私に話してくれた
この言葉が 私の障害肯定の原点だ
人を助けて
気分が悪くなる人はいない
あなたを助けた人は、きっと
その日一日、いい気分であられる
あなたは、体が不自由で
沢山の助けが必要だけど
それだけ沢山の『いい気分』を
みんなにあげられるのよ」



舞夢さんの事務所の前に
出しているメッセージボード

《 活動状況 》

9月

- 2-3日 きょうされん利用者部会(浦丸)
- 3日 エゼル福祉会 採用試験
- 6日 中日新聞主催 就職フェア
- 7日 相談支援従事者初任者研修(麻生)
- 11日 戦争法案反対デモ参加
- 11日-12日 安居楽業ゼミナール(北原)
- 17日 くらしの場交流会(若林)
- 18日 ケースワーク研修
- 20日 介護職員初任者研修 修了式
- 23日 WILL 秋祭り
- 24日 会報発送
WILL 親の会
- 25日 会報会議
NPO 会議
- 29日 名古屋生活支援事業所連絡会 学習会

10月

- 3日 エゼル福祉会 理事会・評議員会
- 5日 相談支援従事者初任者研修(麻生)
- 7日 防災会議
- 9日-10日 第38回きょうされん全国大会
(馬淵・増田)
- 13日 名古屋生活支援事業所連絡会
- 14日 障害分野別研修(浅野)
- 16日 行動援護従業者養成研修 開講
- 20日 自立支援連絡協議会施設部会(若林)
- 21-22日 きょうされん利用者部会(浦丸)
- 22日 名古屋市実地指導
くらしの場交流会(北林)
- 23日 ケースワーク研修
- 25日 県民集会参加
- 29日 WILL 親の会
- 29日-30日 相談支援従事者初任者研修(麻生)



コンビニハウス クリスマス会のお知らせ

皆様からのお申し込みをお待ちしています。

日時 2015年12月5日(土) 13時00分 開演予定
会場 名古屋市総合社会福祉会館(北区総合庁舎) 講堂
名古屋市北区清水四丁目17-1
地下鉄 黒川下車徒歩5分
定員 80名 (定員になり次第、締め切ります)
参加費 600円(チケット代)
プログラム バンド演奏・お楽しみ抽選会 他

介助が必要な方は介助者同伴(チケット必要)でご参加ください。
参加申し込みはコンビニハウスまでお願いします。

電話/FAX 052-505-6082



事務局コーナー

「ご協力ありがとうございました」

9月～10月（敬称略・順不同）

★ ご寄付いただいた方々

(NPO 法人コンビニの会)

※会報購読料1万円以上お振込みの方を含む

永田雅敏 アイ 匿名

(エゼル福祉会)

ウイル親の会

★ 物品寄付をいただいた方々

(コンビニハウス)

本田 真 東原光江

(WILL)

朝比奈幸生 宮田まどか 塩澤しのか

近藤愛季実 廣瀬治代

齊藤末子 河田笑子 澤 幸子

小沼容子 小原末広 赤城町内会の方

★ 活動にご協力いただいた方々

(コンビニハウス)

伊奈晶子 石原正寅 青木政治 茂手木利典

辻本道子 桑原諸彰 黒田隆広 林 和子

高塚朱美 辻本有沙 藤村亜子 酒井まみ子

間瀬敬人 中谷友紀 水野裕哉 小林ほのか

河合尚武 小川阿弓 山崎直人 寺田みどり

前田有紀 楠村ゆき 竹内恵子 稲垣ゆき奈

東原光江 田口陽介 加藤 結 高橋なおえ

神取優香 森島千絵 臼井裕香 赤坂美登里

山口愛加 寺西 剛 土屋京加 三浦結梨恵

星野恭兵 加藤志歩 斉藤 航 北島ゆり香

加藤礼菜 安藤沙恵

(WILL)

森田 衛 梶田明宏 宮田恵美子

武部 文 松井彩斗 戸苅佐知子

須田たみ子

★ 会報発送ボランティア

佐藤美紀子 半田素子

吉田嘉子 大嶋千波



食を支援する

通所部 生活支援員・栄養士

菊地 美枝



ウィルの献立を作らせてもらい始め、約二年が経ちました。食事介助にも入る中で知的や身体障害の方への、食事管理の難しさを実感しています。

食事は摂取し消化吸収され、初めて意味を持ちます。しかし障害の為に食べにくい、食べられない。知的の方では気分が切り替えられない、タイミングが取れずに食べられない、食べたい気持ちはあるけどいろいろな理由でなかなか箸に手が伸びない、むせてしまう。また眠気が強い日は一口も食べられないという方もみえます。

どんな給食を作っても、食べてもらえなければ意味がない。普段現場で皆と過す中で感じる、障害を持った方への食事について、

書きたいと思います。

◆ ◆
ウィルでは、刻み食で提供している方が4名、ペーストの方が2名いらっしゃいます。刻みといっても4名の方皆が同じ形状ではありません。もぐもぐ咀嚼できる力、飲み込める力がそれぞれ違うからです。Aさんは大体重咀嚼ができるので一口大、Bさんは口を動かしても咀嚼はあまりできていないので少し小さめ、Cさんは咀嚼・嚥下共に難しいので細かい刻み、Dさんはもう少し食べやすくペーストを少し混ぜて、という具合です。食材によっては同じ大きさでも食べられないものもあるので、刻み方を変えたりします。食後に本人や介助スタッフから「あれが食べづらい」「これだと食べられない」という声を頂けばまた改善していきます。普段現場にいるので、そういったみんなの生の声が聴けるのはとても嬉しい事です。
知的の方で例に挙げると、お茶もご飯もなかなか口を開けてくれないEさん。楽しく楽しく気持ちを持っていくと、ばかっと開けて

くれるのですが、そこまでいくのが難しいところですよ。お家ではどうやって食べているのか、よくお母様にも伺いました。最初の頃は昼食に1時間半はゆうにかかっていたんですが、あまり長いとEさんも疲れてしまいます。けれどまだ全然食べられていない...と、いつも焦っていました。

一緒に過ごして二年経ち、いろいろな活動や取り組み、外出をして関係を築いて、やっと、大体いつもの量が食べられるようになりました。また、職員の働きかけがないとなかなか席につくことができないFさんや、席につくと大体眠ってしまうGさん。スタッフの声掛けやアプローチの仕方によって食事をとれる量が全く変わってくる方がウィルにおいては数名、いらっしゃいます。発語が得意でない方は、一口も食べられずにお腹がすいていてもそのままやり過してしまっています。食事が提供されてから、みんなが落ち着いて食べられるまで現場スタッフのサポートがとて大切だと感じています。



献立作成だけではない。「現場の栄養士」は難しいなと思います。よく「昼食だけ変えても意味がない」と言われます。昼食は三食の中の大事な一食なので、変えていく意味はあると考えますがやはり朝、夕、間食まで介入したい。ところがアドバイスをしようと思ってもまだまだ信頼関係が築けておらず、聞く耳を持ってもらえないことがあります。特に自立生活（一人暮らし）をしている利用者さんには、好きなものばかり食べていると栄養が偏ってしまうので、介入が必要だと感じます。プライベート時間の食事への介入はこれからの課題だなと思います。

◆ ◆
日々の食事は細胞なおし。ある先生の言葉です。人の体は細胞でできていて、細胞は早くて1日、遅いもので半年かけて生まれ変わります。細胞を作っているのは日々の食事に他なりません。毎日老化シダメージを受けた細胞を、口から摂る栄養で少しずつなおしていくのです。みんなのお腹に入って健康な体を作るまで、障害を持った方は、健常者より

もっともつと周りのサポートが必要です。障害福祉に精通したスタッフと共に、そこまでサポートできる栄養士を目指していきたいと思っています。



みんなで楽しく食べています♪

Dさんのお食事
(半分ごはん半分お粥)
(きざみ食)



銀行口座

三菱東京 UFJ 銀行 小田井支店 店番 238 (普) 口座番号 1440108

特定非営利活動法人 コンビニの会

郵便振替口座 番号 00800-2-35190 コンビニの会

ご意見・ご質問・お問い合わせは下記までお寄せください。〒452-0822 名古屋市中区中小田井 2-431

障害のある人たちの地域生活を支援する

特定非営利活動法人

コンビニハウス Tel (052) 502-7731

Fax (052) 505-6082

コンビニの会

理事 宮川 優子

URL <http://ezeru.sakura.ne.jp/>

E-mail convini@beach.ocn.ne.jp